

中間試験のお知らせ

6月6日(月) 13:30 ~ 15:00

L-921 教室 (ここではない)

- Taylor 展開を巡る諸々
(前の週 (5/30) の講義内容まで)
- 学生証必携

詳細は追って

補講 (質問会) のお知らせ

6月4日(土) 11:00 ~ 12:30

12-201 教室 (ここでは**ない**)

- 自習・勉強会・質問会
- 講義内容は進まない
- 試験範囲は広げない
- 出席は義務としない
- 途中入退室自由
- 質問がなければ途中で帰る

比較判定法 (良く判っている級数と比較)

正項級数 $\sum_{n=0}^{\infty} a_n, \sum_{n=0}^{\infty} b_n$ について、

$\forall n : a_n \leq b_n$ のとき

- $\sum b_n$: 収束 $\implies \sum a_n$: 収束
- $\sum a_n$: 発散 $\implies \sum b_n$: 発散

- 途中からでも良い

($\exists N : \forall n \geq N : a_n \leq b_n$ でも可)

- 定数倍しても良い

($\exists C > 0 : \forall n : a_n \leq Cb_n$ でも可)

合わせて、

$\exists C > 0 : \exists N : \forall n \geq N : a_n \leq Cb_n$ でも可

比較判定法 (良く判っている級数と比較)

典型的な「良く判っている級数」

… 等比級数 $a_n = r^n$

$$\sum_{n=0}^{\infty} r^n = 1 + r + r^2 + r^3 + \dots$$

- $|r| < 1$ のとき収束し、その和は $\frac{1}{1-r}$
- $|r| \geq 1$ のとき発散

→ 大体 |“隣との比”| < 1 くらいなら収束

等比級数との比較

$a_n = r^n$ から “隣との比” r を取り出すには？

- 漸化式: $a_{n+1} = ra_n \rightarrow \frac{a_{n+1}}{a_n} = r$
- 一般項: $a_n = r^n \rightarrow \sqrt[n]{a_n} = r$

→ 一般の数列 (a_n) に対しても、

$\frac{a_{n+1}}{a_n}$ や $\sqrt[n]{a_n}$ が大体 r くらいなら

振舞は同様だろう

d'Alembert の判定法 (比テスト)

正項級数 $\sum_{n=0}^{\infty} a_n$ について、

$$\left(\exists r < 1 : \forall n : \frac{a_{n+1}}{a_n} \leq r \right) \implies \sum a_n : \text{収束}$$

特に、

$$\frac{a_{n+1}}{a_n} \longrightarrow \exists r \quad (\text{収束})$$

のとき、

- $r < 1 \implies$ 収束
- $r > 1 \implies$ 発散

Cauchy の判定法 (n 乗根テスト)

正項級数 $\sum_{n=0}^{\infty} a_n$ について、

$$(\exists r < 1 : \forall n : \sqrt[n]{a_n} \leq r) \implies \sum a_n : \text{収束}$$

特に、

$$\sqrt[n]{a_n} \longrightarrow \exists r \quad (\text{収束})$$

のとき、

- $r < 1 \implies$ 収束
- $r > 1 \implies$ 発散

演習問題

次の級数が絶対収束するような x の範囲は？

$$(1) \sum_{n=1}^{\infty} \frac{x^n}{n3^n}$$

$$(2) \sum_{n=0}^{\infty} n2^n x^n$$

$$(3) \sum_{n=0}^{\infty} \frac{x^n}{n!}$$

$$(4) \sum_{n=0}^{\infty} n! x^n$$

$$(5) \sum_{n=0}^{\infty} \frac{n^n}{n!} x^n$$

典型的な強さ比較

$$\sqrt[n]{n} \longrightarrow 1 \quad (n \longrightarrow \infty)$$

$$\frac{\log x}{x} \longrightarrow 0 \quad (x \longrightarrow +\infty)$$

$$\frac{x}{e^x} \longrightarrow 0 \quad (x \longrightarrow +\infty)$$

より一般に $\forall a \in \mathbb{R}$ に対し、

$$\frac{x^a}{e^x} \longrightarrow 0 \quad (x \longrightarrow +\infty)$$

指数関数は多項式より遥かに強い !!

d'Alembert の判定法 (比テスト)

$$\frac{a_{n+1}}{a_n} \longrightarrow \exists r \quad (\text{収束}) \text{ のとき、}$$

- $r < 1 \implies$ 収束
- $r > 1 \implies$ 発散

Cauchy の判定法 (n 乗根テスト)

$$\sqrt[n]{a_n} \longrightarrow \exists r \quad (\text{収束}) \text{ のとき、}$$

- $r < 1 \implies$ 収束
- $r > 1 \implies$ 発散

で、 $r = 1$ の時は判定不能 (両方有り得る)

特に、単に

$$\frac{a_{n+1}}{a_n} < 1 \text{ または } \sqrt[n]{a_n} < 1$$

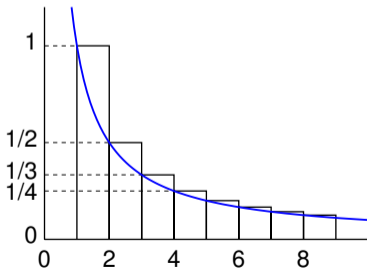
であっても、収束するとは限らない !!

$$\frac{a_{n+1}}{a_n} < \exists r < 1 \text{ または } \sqrt[n]{a_n} < \exists r < 1$$

との違いに注意 !!

例：調和級数

$$\sum_{n=1}^N \frac{1}{n} > \int_1^{N+1} \frac{dx}{x}$$
$$= \log(N+1) \rightarrow +\infty \quad (N \rightarrow \infty)$$



冪級数の収束判定

$\sum_{n=0}^{\infty} c_n x^n$ が収束する x の範囲は？

- $\sum c_n x^n$ が $x = x_0$ で収束
 $\implies |x| < |x_0|$ で絶対収束
- $r := \sup \{ |x_0| \mid \sum c_n x^n \text{ が } x = x_0 \text{ で収束} \}$
: 収束半径 (radius of convergence)

冪級数の収束判定

$\sum_{n=0}^{\infty} c_n x^n$ が収束する x の範囲は？

- $\sum c_n x^n$ が $x = x_0$ で収束
 $\implies |x| < |x_0|$ で絶対収束
- $r := \sup \{ |x_0| \mid \sum c_n x^n \text{ が } x = x_0 \text{ で収束} \}$
: 収束半径 (radius of convergence)

収束半径

$$r := \sup \left\{ |x_0| \mid \sum c_n x^n \text{ が } x = x_0 \text{ で収束} \right\}$$

: 収束半径 (radius of convergence)

- $|x| < r \implies$ 絶対収束
- $|x| > r \implies$ 発散

- 全ての実数 x に対し収束 ... $r = \infty$
- $x = 0$ でしか収束しない ... $r = 0$

比テスト (d'Alembert の判定法) :

$$\frac{|c_{n+1}|}{|c_n|} \longrightarrow \exists s \quad (\text{収束}) \text{ のとき、}$$

- $|x| < s^{-1} \implies$ 収束
- $|x| > s^{-1} \implies$ 発散

n 乗根テスト (Cauchy の判定法) :

$$\sqrt[n]{|c_n|} \longrightarrow \exists s \quad (\text{収束}) \text{ のとき、}$$

- $|x| < s^{-1} \implies$ 収束
- $|x| > s^{-1} \implies$ 発散

s^{-1} : 収束半径

さて、今日は、ここからは、

大学の数学の講義らしく

ちゃんと**定理の証明**をします。

本講義では、中間試験後にもう一回、
ちゃんと定理の証明をする回がある予定

さて、今日は、ここからは、

大学の数学の講義らしく

ちゃんと**定理の証明**をします。

本講義では、中間試験後にもう一回、
ちゃんと定理の証明をする回がある予定

Taylor 展開の問題点(考えなくてはならないこと)

- 級数が収束するか？
- 収束したら元の関数と一致するか？
- 誤差の理論的評価は？
- 項別微積分 (極限操作の順序交換) を
行なってよいか？

→ “Taylor の定理”

Taylor 展開の問題点(考えなくてはならないこと)

- 級数が収束するか？
- 収束したら元の関数と一致するか？
- 誤差の理論的評価は？
- 項別微積分 (極限操作の順序交換) を
行なってよいか？

→ “Taylor の定理”

Taylor 展開の剰余項

“形式的” Taylor 展開

$$\begin{aligned} f(x) &\sim f(0) + f'(0)x + \frac{f''(0)}{2}x^2 + \dots \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \end{aligned}$$

で、右辺の和が収束する時、

$$\sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \left(= \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^N \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \right) = f(x)$$

であるか？

Taylor 展開の剰余項

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^N \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n = f(x)$$

\Updownarrow

$$\left| f(x) - \sum_{n=0}^N \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \right| \rightarrow 0 \quad (N \rightarrow \infty)$$

$$R_N(f; x) := f(x) - \sum_{n=0}^{N-1} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

: n 次の剰余項 (remainder)

Taylor 展開の剰余項

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^N \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n = f(x)$$



$$\left| f(x) - \sum_{n=0}^N \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \right| \longrightarrow 0 \quad (N \rightarrow \infty)$$

$$R_N(f; x) := f(x) - \sum_{n=0}^{N-1} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

: n 次の剰余項 (remainder)

Taylor 展開の剰余項

形式的 Taylor 展開が収束して、元の関数 $f(x)$ と一致

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$



$$|R_N(f; x)| \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow \infty)$$

→ 剰余項 $R_N(f; x)$ の評価が問題

Taylor の定理

$f : \mathbb{N}$ 回微分可能 ($N \geq 1$)

$$R_N(f; x) := f(x) - \sum_{n=0}^{N-1} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

とするとき、

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

系

(1 つ取って固定した x に対して)

$$\exists C > 0 : \forall N : 0 < \forall \theta < 1 : |f^{(N)}(\theta x)| < C^N$$

$$\implies |R_N(f; x)| \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow \infty)$$

従って、

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

注

$N = 1$ のときは、何を言っているのか？

$$0 < \exists \theta < 1 : R_1(f; x) = f'(\theta x)x$$

つまり

$$\frac{f(x) - f(0)}{x - 0} = f'(\theta x)$$

… (Lagrange の) 平均値の定理

Taylor の定理 … 平均値の定理の高次版

注

$N = 1$ のときは、何を言っているのか？

$$0 < \exists \theta < 1 : R_1(f; x) = f'(\theta x)x$$

つまり

$$\frac{f(x) - f(0)}{x - 0} = f'(\theta x)$$

… (Lagrange の) 平均値の定理

Taylor の定理 … 平均値の定理の高次版

Taylor の定理の証明の方針

平均値の定理を 次々と繰り返し用いて
次数を上げていく

数学的帰納法 の形で証明を記述すると明快

“帰納法の仮定” を f' に適用
 $((f', N - 1) \implies (f, N)$ の流れ)

Taylor の定理の証明の方針

平均値の定理を 次々と繰り返し用いて
次数を上げていく

数学的帰納法 の形で証明を記述すると明快

“帰納法の仮定” を f' に適用
 $((f', N - 1) \implies (f, N)$ の流れ)

Taylor の定理の証明の方針

平均値の定理を 次々と繰り返し用いて
次数を上げていく

数学的帰納法 の形で証明を記述すると明快

“帰納法の仮定” を f' に適用
 $((f', N - 1) \implies (f, N)$ の流れ)

Taylor の定理の証明の方針

簡潔な証明のためには、

「平均値の定理」を少し一般化しておく必要有り
(Cauchy の平均値の定理)

ここでは、その元になる基本的な

「Rolle の定理」

から見ていこう

Rolle の定理

f : 閉区間 $[a, b]$ で連続

开区間 (a, b) で微分可能

$$f(a) = f(b)$$

$$\implies \exists c \in (a, b) : f'(c) = 0$$

Cauchy の平均値の定理

f, g : 共に 閉区間 $[a, b]$ で連続
開区間 (a, b) で微分可能

- $\nexists c \in (a, b) : f'(c) = g'(c) = 0$
- $g(a) \neq g(b)$

$$\implies \exists c \in (a, b) : \frac{f(b) - f(a)}{g(b) - g(a)} = \frac{f'(c)}{g'(c)}$$

注: $g(x) = x$ の時が Lagrange の平均値の定理

Cauchy の平均値の定理

f, g : 共に 閉区間 $[a, b]$ で連続
開区間 (a, b) で微分可能

- $\nexists c \in (a, b) : f'(c) = g'(c) = 0$
- $g(a) \neq g(b)$

$$\implies \exists c \in (a, b) : \frac{f(b) - f(a)}{g(b) - g(a)} = \frac{f'(c)}{g'(c)}$$

注: $g(x) = x$ の時が **Lagrange** の平均値の定理

Taylor の定理

f : N 回微分可能 ($N \geq 1$)

$$R_N(f; x) := f(x) - \sum_{n=0}^{N-1} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

とするとき、

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

系

(1 つ取って固定した x に対して)

$$\exists C > 0 : \forall N : 0 < \forall \theta < 1 : |f^{(N)}(\theta x)| < C^N$$

$$\implies R_N(f; x) \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow \infty)$$

従って、

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

演習問題

$f(x) = e^x$ の Taylor 展開の剰余項 $R_N(f; x)$ について、

- (1) $|R_N(f; 1)| < 10^{-4}$ となる
(なるべく小さい) N を与えよ
- (2) e の近似値を小数第 3 位まで求めよ
- (3) 誤差が 10^{-3} 以下であることを保証せよ
(丸め誤差・打切誤差の双方を考慮に入れよ)